
気持ちは伝わる

星 明莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気持ちは伝わる

【Zコード】

N7484E

【作者名】

星 明莉

【あらすじ】

「（シ）シンフォニー」キリ番5555リクエスト小説。蘭は新一にプレゼント選びを手伝つてもらつていた。しかし心の中は新一の中でいっぱい。そのせいできつかくのデータはどんどん変な方向に微妙に薄暗いけど王道です。笑

“どうぞお入り下さい。

新一が近くにいるだけで。

どうぞお入り下さい。

なのに…。

新一はどうして遠いの?

これが幼馴染みの壁なの?

“近く”じゃなくて“傍”についてほしいよ。

大好きだから…。

「蘭?」

私は人混みの中からはつきり聞こえた新一の声にハッとした。

「あ…何?」

「何、じゃねーだろ? 何処の店が見てーんだよ

新一は覗き込むように私を見て言った。

「うーん。どこでもいいよ？」

私はそれを苦笑いで返す。

「あんたあ？ オメーがおつかやんのプレゼントに服を買ひてーから付き合つてくれつて言つたんだろーが」

「だつてつ…男性向けのお店に一人で入るの恥ずかしージゃないつ！」

私は顔を赤らめる。

「はつ、笑わせんな…！ 誰もオメーみてーな女、眼中にねーよつ」

「…」

いつものよつに繰り返すたわいもない口喧嘩。

だけど、なんだか少し間が出来たら…無性に切なさが込み上げる。

ああ…これが幼馴染みなんだって、改めて思うから。

「…」

「…あ…わりい、怒つた？」

「怒つてないつ…！」

「怒つてんじやねーか…」

私はふんだ、と頬を膨らました。

「つたく…。お？」

そんな私を横に、新一はいきなり立ち止まる。

そして私の手を握つてひっぱつた。

「…！ 何するのよつ」

私の胸の鼓動は思い切り高まつた。

「あそここの店、なかなか良いんだ。見てみよーぜ」

「…」

そう言つて私をひっぱりながら歩く新一。

その後ろ姿が本当に格好良くて、私はどきどきしながら見つめていた。

「よかつたな、良いの買えて」

「うん…」

「まあ、ちょっと地味だけじゆうかぢやんじへじへいーんぢやねーか

?

卷之三

- 1 -

その時、

新
?

「だから… もう我慢… 懸かつた… よ」

一
あ

やだ、もしかして私がまだ怒ってると思つてゐるのかな……。
違うの、新一。

私 時々 一人で勝手に考えちゃうの。

新一の特別な存在になれたらしいのになつて。
でも、もうこんなこと考えるのはやめやめ！――

一ノ刀川 橋

「ねえ、ボーリングやらない？」

ホーリングスの出来事のかゆい

新一上諸二ノヘルガビシナ場所ジツテハ片。

私は少し小走りで新一の前まで行つた。

「い」

私たちはすぐ近くにあった小さなボーリング場に入った。

「一時間でいいよね？」

「おう」

簡単な手続きをして、私たちは貸し出されている靴を履き始めた。

「…」

私は思わず新一のその姿に見入ってしまった。

「あんたよ？」

「ううん…なんでもない」

新一ってこんなに足、大きかったんだ。
私よりも小さかつた時もあったのに。

“ぜつてーすぐにオレの方が大きくなるからな！！”

私にそう宣戦布告した昔の新一。

思い出して、なんだか笑っちゃいそう。
さて、そろそろ投げようかな。

私はボールを持ってラインに立ち、意気込んで唇を舐めた。

「えいっ！！」

あろうことか…勢い良く投げよつとしたボールは私の指から擦り抜け、真後ろへ飛んでいった。

「あ…」

そのボールは新一の足元に大きく音を立てて落ちた。
「オメーなあ…ボールは最低限前に投げるよ…！」

「うひ、ごめん！…当たらなかつた？」

「…」

新一はスッと立ち上がりつて私の方へ近づいてきた。
やつぱり当たつちゃつたのかな？怒られるかな？
それともバカにされる？

「蘭」

「…！」

私は新一の優しい声にびくつこして目を開じた。

その時、だつた。

肩に温もりを感じて、私はそつと閉じたばかりの目を開ける。

「…新一？」

「まずフォームがなつてねえんだよ」

新一は私を包み込むようにして傍にいた。

「いいか？腰はひかねーで…」

「うん…」

新一の指先が私の腕を触れていく。

距離もほとんど密着状態で…。

どうしよう、こんなにくつこいたら…。

聞こえむやうじやない、わつきからじきじきせまなしの心臓の音。

「新一…！」

「え？」

私は慌てて新一の腕を振りほどいた。
まだこの気持ちは伝えられないよ。

だつて……恐いじゃない……？

「…つ…」めん…」

新一は申し訳なさそうに腕を下ろした。

悪くないんだよ...?

この人親一

「…」
「…」
「…」
「…」

「コホツ」

やだなあ、ほんの。

新一 い、モロカシイ話に接して
“ よあ、蘭一！！”

“バーコ。この問題は相似を使って解くんだよ”

“ そんてな
その時のホーリスの口語で… ”

しんいち。

私は気が付くと瞳いつぱいに涙を溜めていた。

ダメだなあ、私。

どうしてこんなに勇気がないんだろう？

きっと新一だつて思つてるよ。

“何か言つて”つて…。

「新一」

「！…蘭」

もう恐がらない。

前を向かなくちゃ。

「私、新一のこと好つ…！…！」

手に持つていた荷物が床にドサッと落ちた。
私も思わずバランスを崩しそうになる。

「新一…？」

“好き”

そう伝えようとした私は、新一に力いっぱい抱き締められていた。

「蘭が好きだ」

「えつ…」

「蘭が好きだ…好きだ好きだ好きだ…！」

新一はより一層強く私を抱き締める。

「…つ」

新一もなの？

私のこと、幼馴染み以上に想つてくれたの？
さつきまで私の目に溜まっていた涙は一気にこぼれ落ちた。

「…新一…！」

「蘭…？」

私は新一の右頬に強く唇を押し付けた。

「…！」

「私の気持ち、伝わった…？」

新一は顔を真っ赤にして偉そうに言つた。

「バー口…！…んなもん最初つから分かつてたよ…！…！」

「ほんとに…？」

私はあはは、と笑つてみせた。

そして新一はそつと腕を解いて歩きだした。
「あつ、待つてよ…！」

私はそう言つて落とした荷物を拾つ。

「蘭…！」

その新一の声に顔をあげた。

新一は私に目一杯広げた手の平を差し出した。

「ホラよ、帰んぞ」

「うん」

私は返事をしながらその手を握る。

こうして私たちはまた街中を歩き始めた。
たださつきと違うのは…。

二人の間の両手は、しっかりと強く繋がれている。

私と新一は“近く”ではなく“傍”でもない。

いつの時も“隣”にいられる存在だったんだね。
大好き

-END-

(後書き)

(あとがき・・・)ノ

うつわ王道ーーー！

薄暗いのに王道ーーー！笑

密着状態でボーリング指導とかつづく！

書いてた本人がめちゃめちゃ恥ずかしかったのは言つまでもないで
すー。笑

始めは蘭ちゃんがボーリング失敗した時ほんとは新一の頭にぶつけ
ようと思つたんですけど…。

さすがに死ぬかもと思つたんでやめました。笑

まじこ様、キリ番5555達成おめでとうござります\

ちなみにタイトルはB○A曲からーーー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7484e/>

気持ちちは伝わる

2010年12月30日08時18分発行